

フィールドワーク便り

はかな
殺し屋の儂き運命

松尾 隆之介*

2019年10月。気温は40度。日光が肌に痛いほど照りつける。汗が頬をゆっくりとしたたる中、砂煙を巻き上げ、私たちはある場所へと向かった。

調査地

舞台はアフリカ南部に位置する、ボツワナ共和国（図1）。カラハリ砂漠が広がる砂の大地の中に、ひととき大きな湿地帯が存在す

る。カラハリの宝石と呼ばれるその湿地帯は、「オカバンゴ・デルタ」。国際的に重要な湿地とされている [Jansen and Madzwamuse 2003: 143-144]。世界最大の内陸デルタといわれ、その豊富な水と豊かな生息環境を求めて多くの大型野生動物が生息している [Darkoh and Mbaiwa 2009: 161-162]（写真1）。そのオカバンゴ・デルタのはずれ、とある枯れ川に、ある生き物の群れがいると聞き、急遽向かった。オカバンゴ・デルタの大部分（特に、年中水が存在している中心部を

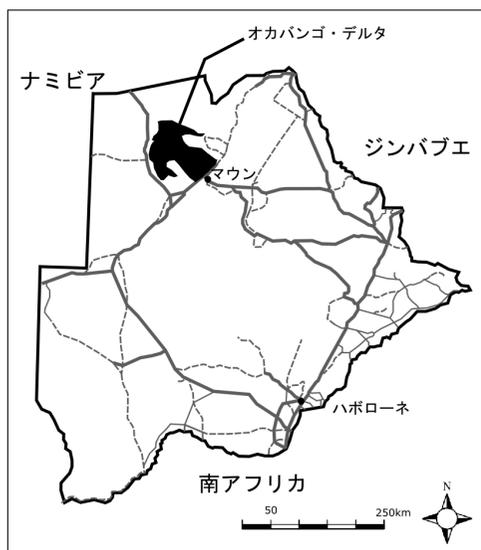


図1 ボツワナ共和国の地図
国境内の線は道路を示している。



写真1 オカバンゴ・デルタ（保護区内）の様子
奥にアフリカゾウがいる。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真2 ため池に密集するカバの群れ

はじめとして)は保護区に指定されているが、向かった場所は保護区の外に位置している。枯れ川のすぐ隣には、村があり、現地の人々が暮らしている。現地での調査中、知り合った友人と行動を共にする中で、その友人にこの場所の情報を教えてもらった。今回はアフリカ初渡航になり、ボツワナでの人脈がないに等しい私にとっては、現地でできた友人は大切な相談相手であり、貴重な情報源にもなりうる。彼に車の運転を頼み、コンクリート舗装された日本とは、景色も運転のしやすさも全く異なる砂道を進み、現場へと向かった。現場に近づくとつれ、ため池が見えてきた。その中に、大きな岩のような物体が並んでいた。よく見ると、それらの岩はそのそと動いていた。カバ (*Hippopotamus amphibius*) である。まるで大岩のようなグレーの巨体が、200頭あまりも狭いため池の中にひしめき合っていたのだ(写真2)。

オカバンゴ・デルタ

10月のボツワナは乾季の終わりを迎え、1年で最も水が少なくなる季節となる。雨季や乾季の初めには潤っていた場所も、すっかり水が無くなり、枯れ果ててしまう所も多い。しかし、オカバンゴ・デルタはそのような乾季にも水が存在し、この川でも去年まではこの時期に水は存在していたと、村人は語った。

オカバンゴ・デルタは、ボツワナの北に位置するアンゴラ西部と、ナミビア北部の高地から発したオカバンゴ川とその支流がカラハリ砂漠の砂の中に流れ込み、ほぼ2万km²に達する湿地を作っている[富田2007:30-31]。しかし近年、これらの水の供給源となっているアンゴラでは、開発や人口増加が進み、その水の供給量が減りつつあり、そのためオカバンゴの周辺に位置するこの川の水はとうとう枯渇してしまったと推測できる。

カバの生態

カバは、アフリカでは2種の現生種で代表される。コビトカバ (*Hexaprotodon liberiensis*) は、アフリカ西部の森林と海岸平野に分布し、体重は280kgに達する。一方、カバは体重3,000kgにも達し、約10倍の差がある。サハラ砂漠以南ではよく知られる種であり、大きなグループを作ることもある。頑丈な下顎と分厚い首をもっている。交尾の権利のための競争の際、下顎による突きや前歯による切り付けなどで攻撃し、時にはかなり狂暴になる。あくびの間、顎は100

度以上開く [富田 2007: 124-125].

カバと人の関係

カバは本来、体をどっぷりと沈められるくらい豊富な水を必要とする。カバの皮膚は紫外線に弱い。そのため、日中は直射日光を避けるために、その多くの時間を水中で暮らすのだ。眼窩（眼球を収めている頭蓋骨のくぼみ）は頭骨の中でも高い位置にあり、その体の特徴からカバが水生の環境と生活に適応していることが分かる [Coughlin and Fish 2009: 677-678]。体の大きさと、ほとんどの場合水中にいるその生活スタイルから、カバは捕食者に狙われることはほとんどない [富田 2007: 125-127]。

この川に生息するカバの群れは、水がなくなってしまうと本来の生息地を失って死滅してしまうかもしれない。そこで、地域の人々の活動によって、地下水をくみ上げ、このため池がカバのために作られた。そのため、この川にいるカバの群れはかろうじて存続して



写真3 ため池周辺のカバの死骸

いるのだ。人の活動が、巡りめぐって野生動物に影響を与える。そんな環境問題の一端を垣間見た気がした（写真3）。

カバは、日中は水中で暮らすことが多い反面、夜になると水中を出て、食料の草を求めて陸を徘徊する。その際、よく整った小道ができ、他の多くの動物にとっても簡単に水場に到達できる通路となっている。陸地に上がった時、人との近距離での接触があったなら、カバは人を襲うことがある。警戒心も強く、人が近づいてきてもそれを察知して襲うことがある。小さな船で近づこうものなら、大惨事を招きかねない [富田 2007: 125]。アフリカでは現地の人々から非常に危険視されている動物である。毎年、多くの人がかばに殺されているのである。見た目はぼっちゃりしていて、足も短く、普段はゆっくり歩いているため、あまり危険なイメージはもちにくいかもしれない。しかし、実は気性が荒く、走ると人間よりも早いため、本気で追いかけられた時には逃げ切ることは難しい。

私は学部時代、岐阜県の高山市でニホンカモシカを調査していた。ニホンカモシカは、過度の狩猟によって一時期個体数が激減した。そこで国は、ニホンカモシカを天然記念物に指定し、現在まで狩猟は厳しく規制管理され、保全されている。近年は個体数が徐々に回復している。そして奥山から人の生活圏付近まで生息域が広がり、地域では農作物を荒らされる「食害」が起きている [落合 2016: 208-221]。私が調査した高山市でも、農家の方から「カモシカに農作物を食べられた」と話を聞く機会があった。人の脅威では

ありながら、大規模な人為的影響で生存が脅かされ、地域レベルで守られ生きているカバ。そして、大規模に人為的に守られながらも地域レベルで被害を出しているカモシカ。アフリカと日本にまたがる人と動物の関係について、この2つの事例を対比させながら考えていた。

私は、このカバたちのもつ生態、境遇、そして人との関係について、今回のアフリカでの調査で感じ入るものがあり、カバを研究対象にしようと考えた。ボツワナは、「ツワナ」と呼ばれる民族が大部分を占める国で（少数民族としては、たとえば「サン（ブッシュマン）」と呼ばれる民族）、このカバの群れを見た地点にある村は、ツワナの人々が生活している。彼らは、「カバは危険な動物」だと認識しているが、その中でカバとどのような距離感で同じ地域に共存しているのかは、非常に興味深いと感じた。

時にはそのような危険な「殺し屋」となるカバでも、こうして200頭あまりが入るには小さすぎるため池にひしめき合っているの

を見ると、心がギュッと締め付けられる思いになる。もうすぐ雨季が来る。水が戻り、豊かな環境になるまで、是非とも耐えてほしいと、心の中で願い、その場をあとにした。

引用文献

- Coughlin, B. L. and F. E. Fish. 2009. Hippopotamus Underwater Locomotion: Reduced-gravity Movements for a Massive Mammal, *Journal of Mammalogy* 90(3): 675–679.
- Darkoh, M. B. and J. E. Mbaiwa. 2009. Land-use and Resource Conflicts in the Okavango Delta, Botswana, *African Journal of Ecology* 47: 161–165.
- Jansen, R. and M. Madzwamuse. 2003. The Okavango Delta Management Plan Project: The Need for Environmental Partnerships. In A. Turton *et al.* eds., *Transboundary Rivers, Sovereignty and Development: Hydropolitical Drivers in the Okavango River Basin*. Pretoria: African Water Issue Research Unit and Green Cross International, pp. 141–166.
- 落合啓二. 2016. 『ニホンカモシカ―行動と生態』東京大学出版会.
- 富田幸光. 2007. 『図説アフリカの哺乳類―その進化と古環境の変遷』丸善株式会社.

若者の「性」をめぐる

—インドネシアにおけるフィールド調査から—

二重作 和 代*

「ねえ、日本では性的なことは自由にできるの？本当なの？」

それはブリトゥン島でのフィールド調査を終え、冷たい柑橘ジュースをカフェで飲みながら、カウンターパート先のDさんなどの年配女性たちと休憩している時だった。突然突拍子もないことを尋ねられ、筆者は思わず面食らってしまった。興味深そうに筆者を見つめる彼女たちに囲まれ、渋々、彼女たちの様子をうかがいながら「日本では…」と返答することにした。たどたどしく話す筆者に、「そんな風に話すということは、あなた、経験があるからなのね」と彼女たちは笑った。

このような体験を思い起こすと、性に関する話が自由にできるように思えるのだが、おそらくこれは相手が私のような外国人であったからで、現地の未婚の若者、とりわけ女性が声高に性的な話をするとはやはり憚られるものであるように思う。少なくとも、筆者の周辺では同性同士であればまだしも、異性間で性に関する話をするとはあまりなかった。さらに言えば、上述のDさんからの質問は、これまで他の女性研究者も経験してきたような「研究ばかりして、子どもを産まないのか？」という、現地の人々が未婚研究者

に対して抱く疑問の延長線上にあったのだとも思う。また筆者は同時に、一見インドネシアの中高年層が性的なことから一定の距離を保っているようにみえる現状と、性的な情報を容易に入手・共有し、時に行動する若年層との間にギャップがあるように感じた。

2本の青い線

インドネシアでは特に2000年代初頭以降、若者、思春期世代の性を取り巻く環境が経済発展やインターネットの普及などにより変化している。2019年6月には「2本の青い線 (*Dua Garis Biru*)」という、高校生の望まない妊娠を題材にした映画が放映され、インドネシアで大きな波紋を生んだ。インドネシアでは日本以上に「性」がタブー視されており、性交渉にまつわる自己の身体の仕組みや、避妊方法などの正しい情報や知識を得ることは難しい。一方で、インターネットによって多くの若者が簡単にポルノ動画などにアクセスできるようになり、誤った知識のまま性行為に及ぶ若者も少なくない。

映画のタイトルである「2本の青い線」は、妊娠検査薬の陽性を示す線を指している。映画公開時にはSNSでこの映画に関する投稿

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 映画「2本の青い線 (Dua Garis Biru)」のポスター

が飛び交っていた。作中では、主人公の女子高校生が恋人と避妊せずに性行為に及び、妊娠してしまう。2人は両親に内緒で子を出産しようと計画するが、結局は隠し通すことはできず、彼女は高校を退学する。その後彼女は出産することになるも、「子どもが子どもを育てることなどできるわけがない」と両親に説得され、最終的に赤ん坊は養子に出される。本作品はフィクションであるが、妊娠の末、10代で結婚し出産したり、あるいは秘密裏に堕胎をしたりする、インドネシアの若者を取り巻く「性」の現状を映し出している。

若者の性を取り巻く環境

インドネシアの若者、特に思春期世代の性教育、性環境の整備に着目した諸研究では、しばしば若者に適切な性教育を施すこと、そして避妊などの機会を既婚者と同様に与える必要性が指摘されている [cf. Susanto *et al.* 2016]。それらの研究では、婦人科などで未婚者が受ける差別的な対応についても言及がなされていた。特に未婚の若者への避妊に関する情報やサービスの提供に関する政策は現時点でまだなく、彼らが必要なケアや情報を十分に得ることができない環境が、現在のインドネシアにはあるという。

たとえば、インドネシアにおける健康に関する法律 (UU No.36/2009, UU No.52/2009) ではリプロダクティブ・ヘルスにまつわる条項があるが、そこではケアや情報を得るにあたって「法的に婚姻関係にあること」や「宗教規範に抵触しないこと」が前提とされており、¹⁾ 未婚者を対象にした条項は見受けられない。しかしながら実際には、未婚であっても性行為に及ぶ場合もあり、インドネシアのジャワ島で実施された調査²⁾によれば、未婚の若者 (15～24歳) のうち15～18歳は1.5%、19～21歳は4.3%、そして22～24歳は11.7%が性行為を経験している [Budiharsana 2017]。

また、インドネシアでは教育機関で性教育がカリキュラムに含まれていないことが多いため、性教育の不十分さについてもしばしば

1) たとえばUU No.36/2009 第72条, 第74条およびUU No.52/2009 第21条, 第23条など。

2) ジャワ島の6州 (バンテン, ジャカルタ, 西ジャワ, 中部ジャワ, ジョグジャカルタ, 東ジャワ) の若者 (15～24歳) 5,150人を対象に調査を実施 [Budiharsana 2017]。



写真2 薬局で販売されていたピル

批判がなされてきた。特に多様な避妊手段に関する知識は、若者のリプロダクティブ・ヘルス/ライツのために必要だと指摘されている。

避妊具へのアクセス

インドネシアで用いられる避妊方法は、日本と大きく変わらない。コンドーム、低・中容量ピルの使用が主流である。³⁾ 特にピルは「家族計画ピル (Pil KB)」(写真2) と呼ばれ、既婚女性の出生数をコントロールすることが目的で使用されることが多い。入手できる手段が限られているため、未婚者にとってはコンドームが最も容易に入手できる避妊具である。ジャカルタなどの都市部では、スーパーやコンビニなどで簡単にコンドームが入手できる。ピルも、街中の薬局の処方箋で購入することが可能だ。しかし、筆者の調査地のような地方社会ではそれらを入手すること自体が困難である。

以前、ブリトゥン島に住む筆者と同世代であるムラユ人のAさんに避妊具の入手方法

を尋ねると、「コンドームはタンジュンパンダン(ブリトゥン島の市街地)に行かないと手に入らない。それか、華人の友人が仲介して売ってくれることがあるから、そこで買うこともできるよ。ピルはわからない」と話してくれた。実際、市街地から離れた地域のスーパーにコンドームが陳列されているのを筆者は見たことがなかったが、タンジュンパンダンではスーパーの一面にひっそりと置かれていた。ピルはさらに見つけることが困難であった。市街地に5軒ある薬局のうち、1軒にしかピルの取り扱いがない、という具合である。さらにピルは店頭で陳列されていないため、どの薬局でも、「家族計画ピルはありますか」と尋ねなくてはいけなかった。

「性」と若者の関わり

Aさんは筆者と会話中、自分で避妊具を購入することに抵抗があり、人に見られたくない、とも話していた。おそらくインドネシアの若者にとって、避妊具を手にすることは性的なことと自分との接点を示す「恥ずかしく、(社会あるいは宗教的に)望ましくない行為」なのだろう。このような「性」をタブー視するような意識は、ジャカルタの若者と接する中でも見受けられた。

たとえば筆者はジャカルタに滞在中、友人に誘われキリスト教徒の学生集会に参加したことがある。参加していたのは大学生で、そのうちひとりの女子学生が性交渉の経験を泣

3) ただし、既婚者の家族計画を目的とした避妊では避妊注射の利用が全体の63.71%を占めており、ピルの利用は17.24%となっている [Pusdatin KemKes 2019].

きながら懺悔し、「今はもうしないけれど、あの時私は罪を犯した」と話していた。性に関する情報がインターネットで瞬時に手に入り、避妊具へのアクセスも比較的容易で、性的にアクティブな若者が他地域と比べて多いと思われるジャカルタでも、性的なことと一定の距離を保つことが「良い」と考える若者も多い。しかし一方で、「望まない妊娠をしてしまい、家族に知られたくないがために相談できず、秘密裏に墮胎処置を行なった」という話も耳にする。

インターネットが若者の安易な性行為への動機付けとなるという指摘がある一方で、インターネット上で性教育的な情報を共有しようという肯定的な取り組みもある。たとえば、インドネシアの動画配信アプリ（Vidio）では、性教育的コンテンツが配信されている。その他にも、たとえば女性下着を取り扱うベンチャー企業では、商品だけでなく女性の身体構造にまつわる情報をインスタグラムでも発信しており、多くの若者がフォローしている。しかしながら、このように発信された情報は全てのインドネシア人の目に止まるわけではない。さらに、宗教的にこうした取り組みを肯定的には受け取れないという人もいるであろう。インドネシアの若者たちは、こうした揺らぎに晒されている。

おわりに

さて、ここまでインドネシア（特にジャカルタ、およびブリトゥン島）における若者の「性」を取り巻く現状についてまとめた。インドネシアの若者は、インターネットなどを

通して容易に性に関する情報にアクセス出来るようになった。彼らが収集する情報は正しいものばかりでない一方で、公的に正しい知識を得る機会ほとんどない。加えて、避妊具に関しても都市部と地方社会ではそのアクセス性に差がみられる。「性」をタブー視する社会的・宗教的背景が、若者が正しい知識を得、行動するうえで妨げとなっている場合もある。

ところで、日本の性をめぐる環境も、実際は多くの課題を抱えている。性教育に関しても日本はオランダをはじめとするヨーロッパと比較すれば不十分だという見方もあり、単に性行為に関する知識を学ぶだけではなく、自己の身体に関する構造や形態、さらに多様なジェンダーのあり様について学ぶ機会を取り入れるべきだという指摘もある [橋本 *et al.* 2011]。インドネシアの若者を取り巻く現状も、決して他人事ではないのだ。

引用文献

日本語文献

橋本紀子・篠原久枝・田代美江子・鈴木幸子・広瀬裕子・池谷壽夫・長香織・小宮明彦・渡部真奈美・茂木輝順・森岡真梨. 2011. 「日本の中学校における性教育の現状と課題」『教育とジェンダー』9: 3-20.

英語文献

Budiharsana, Meiwita. 2017. Contraceptive Services Available to Unmarried Sexually Active Adolescents, *Makara Journal of Health Research* 21(2): 68-74.

Susanto, Tantut, I. Rahmawati, E. Wuri Wuryaningsih, R. Saito, S. Syahrul, R. Kimura, A. Tsuda, N. Tabuchi and J. Sugama. 2016.

Prevalence of Factors Related to Active Reproductive Health Behavior: A Cross-sectional Study Indonesian Adolescent, *Epidemiology and Health* 38: 1-10.

インドネシア語文献

Pusdatin KemKes. 2019. BAB V. Kesehatan Keluarga. In Pusat Data dan Informasi Kementerian Kesehatan Republik Indonesia, *Profil Kesehatan Indonesia 2018*. pp. 111-170.

サンタクルーズ諸島における羽毛貨トアウの現在

山口 優 輔*

はじめに

本報告はソロモン諸島国テモツ州における結婚様式と羽毛貨を紹介する。

テモツ州は国の最東部に位置する州であり、州都ラタがあるネンド島を中心に構成される州である。ネンド島から北東にリーフ環礁とダフ諸島が、南東にウトゥプア島とヴァニコロ島が、東にティコピア島とアスタ島が位置しており、この一帯を合わせてサンタク

ルーズ諸島と呼ぶ(図1)。

筆者は2019年9月から2020年3月に、ダフ諸島(ラタから約180キロメートル)およびリーフ環礁(同約80キロメートル)においてフィールドワークを実施した(図2)。リーフ環礁の島の多くはサンゴ礁の「低い島」で構成され、ほぼ全ての島に人が居住

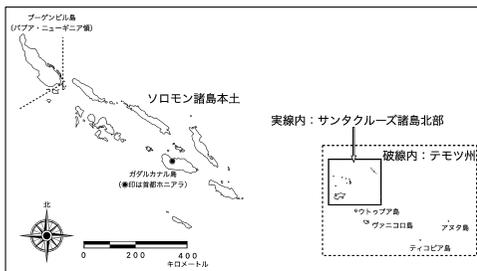


図1 ソロモン諸島国内におけるサンタクルーズ諸島の位置

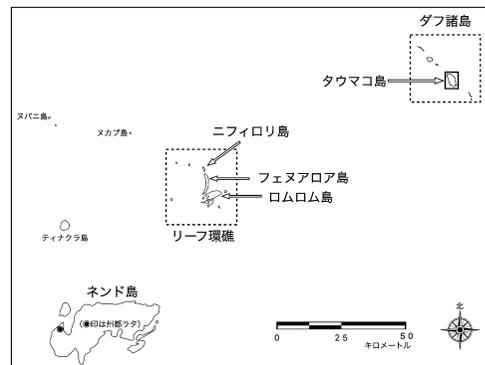


図2 サンタクルーズ諸島北部におけるネンド島・リーフ環礁・ダフ諸島の位置

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

している。一方、ダブ諸島は隆起性火山島の「高い島」と3つの人工島で構成されるが、人が居住するのは最も大きなタウマコ島とその周囲の人工島に限られる。

ソロモン諸島の国民の大半はメラネシア系の人々であるのに対し、離島部には域外ポリネシア (Polynesian outlier) と呼ばれる人々がいる。リーフ環礁では島によってはメラネシア系だけでなくポリネシア系の人々が居住し、ダブ諸島には主にポリネシア系の人々が居住している。

羽毛貨について

サンタクルーズ諸島ではメラネシアとポリネシアの人々が古くから交流したため、独特な文化が数多く残されている。そのひとつに伝統的な貨幣の羽毛貨トアウ (tevau) が知られている。この羽毛貨は、鳥の真紅の羽でつくられた貨幣であり、男性が妻をもらう際の婚資、カヌーや豚などの購入、規則を破った際の賠償など幅広い用途で用いられてきた [田井 1996]。



写真1 一般的な羽毛貨 (国立民族学博物館にて筆者撮影)

一般的な羽毛貨の形態は、幅5センチメートル、長さは引き延ばされた状態で約5から9メートルのベルト状で、その片面に学名 *Myzomela cardinalis* というミツスイの真紅の羽毛が全面に貼り付けられている。通常ベルトは巻かれて保管されている (写真1)。用いられる鳥はココナツの殻を用いた罫によって捕獲される。一般的な大きさの羽毛貨に対し、300羽のミツスイが必要とされる [田井 1996]。

これらの羽毛貨はサンタクルーズ諸島全体で交易に用いられてきたが、羽毛貨の製作には複雑な伝統的技術を必要とし、その製作はネンド島の技術を伝承する者に限られていたという [Davenport 1962]。

幅広い用途で用いられてきた羽毛貨だが、植民地政府の介入やソロモン諸島国政府紙幣の発行、また若者たちが羽毛貨の製作を嫌うようになったために、羽毛貨の貨幣としての価値は衰退の一途を辿っている。

ソロモン諸島の一部では、男性が女性両親に対価としての婚資を支払い、嫁を「買う」ことで結婚が承認される習慣がみられる [柿澤 1996]。サンタクルーズ諸島ではこの嫁を「買う」ための婚資に羽毛貨が伝統的に用いられてきたが、現在では代わりに紙幣を用いる機会が増えているとされる [田井 1996]。

ダブ諸島における現在の結婚様式

さてここで、ダブ諸島でみられた、タウマコ島の男性と人工島タフアの女性との結婚式について紹介する。2020年1月におこなわれた。



写真2 棒に挿した紙幣を妻側両親へと運ぶ夫側親族の女性たち

結婚を申し入れる日より以前に、夫になる男性は予め自身の親族の協力を得て婚資を揃える必要があった。婚資が揃うと、夫の女性親族がそれをもって、妻側の待つタファへと向かった。

ここでは羽毛貨が用いられることはなく、紙幣が用いられた。紙幣は1メートルほどの棒に100ソロモンドル（1ソロモンドルは約15円）紙幣を10枚単位で差し、それを今回は8本（8,000ソロモンドル）用意していた。

タファに到着すると、夫側女性親族は、婚資の棒を掲げながら妻側の両親の待つ家へと入っていった（写真2）。家の中では夫側親族が妻側の両親に対し婚資を渡すことで、娘を貰う了承を得ていた。妻側両親の承諾後、夫側親族の女性たちが花嫁を連れ出し、再び列をなして花嫁を着飾る家へと移動した。

次の家は女性と子どもだけが中に入ること許され、中では花嫁が華やかな衣装に着飾られていた。花嫁が着飾るのを待つ間、他の男性たちは家の周囲で談笑しながら待つお

り、女性や子どもたちから檳榔やタバコ、お茶などが配られ、天花粉や香水、スプレーなどを顔や腕に塗られながらもてなされた。

花嫁の着飾りが終盤に差し掛かると、外で待つ人だかりの中から、数人の「チーフ」と呼ばれる首長男性たちが順々に話し始めた。あるチーフは花嫁の両親が結婚を承認した旨を報告し、またあるチーフは、新しい生活を始める2人の門出を祝う言葉や新しい家族を自身のコミュニティに迎えることができた喜びについて演説した。

その後、着飾った花嫁と両家親族の女性たちは、夫の居住する地区へと列をなして向かった。花嫁たちの列を追うように、他の親族たちもぞろぞろと列に続いた。タファからタウマコ島本土へは海を徒歩で渡って移動した。

タウマコ島本土に上陸後、花嫁の列は夫の待つ家へと向かったが、到着した際、夫は畑に外出しており不在だった。結婚式としては花嫁が婿の家に着した際に終了とみなされ、親族数名を残してほかの者は解散し結婚式は終了した。

結局、最後まで羽毛貨が登場することはなかった。

ダフ諸島およびリーフ環礁において現在残されている羽毛貨の知識

住人らによると、ダフ諸島において、羽毛貨は現在貨幣として全く流通しておらず、製作している者は誰もいないという。また、島には未だに羽毛貨を所有する者もいるらしいが、滞在中に確認することはできなかった。



写真3 かつてダフ諸島で羽毛貨用に獲られていたミツスイ (*Myzomela*) 属の鳥

一方で、高齢者のなかには羽毛貨についての製法を知っている者もいた。鳥の捕獲方法の知識も残されていた。

鳥の種を確認するため、現地の少年がこの鳥を捕まえてくれた。それはミツスイ属に分類 (*Myzomela*. sp) され、頭部から胸部、そして背側の一部が真紅に覆われ、残りは黒色の羽に覆われる全長10センチメートルほどの個体であった(写真3)。観察後に、この鳥は逃がした。

リーフ環礁においてもダフ諸島と同様に流通している羽毛貨を確認することはできなかった。ニフィロリ島では羽毛貨を製作し、所有している者もいると聞いたが実物は確認できなかった。

環礁のフェヌアロア島では羽毛貨を所有している世帯があった。しかし、この羽毛貨は、これまで知られてきた帯状の羽毛貨とは形態が異なり、木製の棒のようなものの周囲に真紅の羽毛を巻き、その先端に赤から黒へのグラデーションの羽が放射状に伸びるように取り付けられた棒状の羽毛貨だった(写真4)。



写真4 リーフ環礁フェヌアロア島で正面(左)と上部(右)から撮影した棒状の羽毛貨

いくつかのバリエーションもあり、棒の周囲に帯状に黄色い羽毛を混ぜたものや、先端に赤とは異なる白い綿毛のような羽を取り付けたものもあった。一般的な羽毛貨が約300羽のミツスイを必要とするのに対し、この棒状の羽毛貨は1本約3羽で充分という。もしこの棒状の羽毛貨を現在の価値で人に売るならいくらぐらいかと尋ねたところ、1本あたり約100ソロモンドルという回答であった。

おわりに

ダフ諸島における現在の結婚様式では、羽毛貨を婚資として用いていることは確認できなかった。婚資としての羽毛貨は既に紙幣に移行していることが裏付けられた。

このように羽毛貨の利用はなくなった一方、まだ所有している者や製法を知っている者もいることからすれば、知識が消滅したわけではない。

また、これまで羽毛貨作りはネンド島でおこなわれるといわれてきたのに、リーフ環礁

でも作られていることが確認された。これは注目に値する。今回確認された棒状の羽毛貨は、形状こそ一般的なベルト状のものと異なるが、現在においても製造されていたのである。

これらの羽毛貨が、現在どのような役割を果たしているのかは、今後の調査が必要である。可能性としては、ネンド島への輸出を目的として製造されており、またネンド島では伝統的儀式や、何らかの取引に用いられるというものである。

婚資や結婚式においてすらも、既に羽毛貨は使われなくなっていたが、羽毛貨がまだ消

滅したわけではない。羽毛貨についての記録と、現代における役割の解明が必要なのである。

引用文献

- 田井竜一. 1996. 「羽毛貨」秋道智彌・関根久雄・田井竜一編『ソロモン諸島の生活史—文化・歴史・社会』明石書店, 152–158.
- 柿澤由美. 1996. 「くらしと女性」秋道智彌・関根久雄・田井竜一編『ソロモン諸島の生活史—文化・歴史・社会』明石書店, 348–357.
- Davenport, W. 1962. Red-Feather Money, *Scientific American* 206(3): 94–104.

Saviors to the Citizens or Mere Entrepreneurs? Fluidity of the Informal Management of *Tera Askebari* in Addis Ababa

Eunji CHOI *

Cell Phone Pickpocketed at Minibus Terminal
As many of the *faranji* (foreigners) who often use minibus in Addis Ababa know from experience, taking a minibus requires great attention because the moment you let your guard down, you may lose your personal belongings! This happened to me around six years ago when I was taking an Amharic class

at Addis Ababa University (AAU). One day, my friend Chen, a Chinese student working on her master's degree at AAU, and I decided to go to the central post office to pick up some parcels. Since I was not used to taking minibuses, Chen kindly instructed me about which routes I should take. After completing our errand, we went to a nearby station in

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

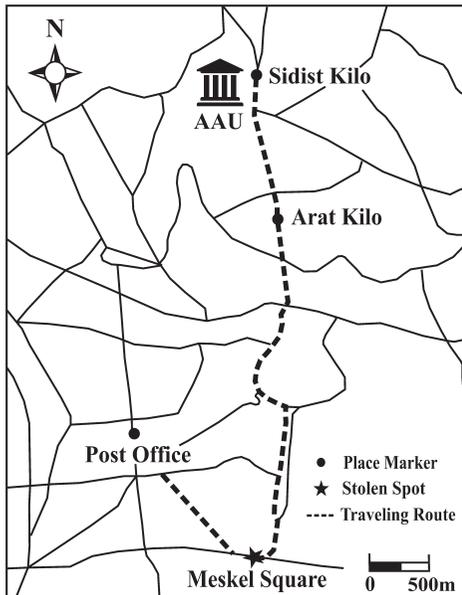


Fig. 1. The Travel Route Chen and I Took and the Place Where Chen's Cellphone Was Stolen

Meskel Square. We needed to take a minibus bound for Sidist Kilo or Arat Kilo, where the university is located (Fig. 1). When we arrived at the terminal, many *radat*⁴⁾ were announcing various destinations at the same time. Amidst the blaring sounds, both Chen and I were bewildered. Some *radat* teased us, saying *chung chung* in mockery of the Chinese language, and some of them even tried to pull and drag us to their minibuses. Finally, we settled in a vehicle and heaved a sigh of relief. However, our relief was premature because I heard Chen screaming, “Oh my god! I lost my phone!”

Tera Askebari as Savivors?

Taking a minibus was not always comfortable for me. Sometimes, I was blocked from getting into the vehicles merely because I was *faranji*. I was not the only one treated this way; I observed hundreds of people, waiting in the middle of the street to take a minibus, hoping that one would stop for them. Under these circumstances, I discovered a group of people called *tera askebari*, who manage the minibuses in some terminals. Under the guidance of the *tera askebari*, passengers were lined up and the minibuses are arranged in a fairly manner. In 2014, I found *tera askebari* in major terminals, like Bole Bras, Markato, Piazza, Megenagna, and Kazanchis, but in 2017, I observed them on almost every corner of the city. For someone like me, who has faced difficulties getting on a minibus, *tera askebari* were lifesavers. Standing in line was much more pleasant than being jostled by the crowds (Photo 1 and 2).

“Big Men” Seized a Business Opportunity

Tera askebari maintain order with regard to minibuses and passengers in the minibus terminals. In Amharic, the word *tera* means “turn” or “shift,” and *askebari* means “someone who maintains something.” In the late 1980s, people of the gangster group figured out that tussling and disorder often occurs

4) Minibus attendants who collect money and call out destinations.



Photo 1. People Flocking to Get on a Minibus

among minibus workers. In a ping-pong like situation between passengers' haste to ride minibuses and the profit-seeking behavior of the minibus operators, the latter were acquiring a bad reputation. They become aggressive in response to passengers who were in a hurry. In this situation, street youths, who tend to be thuggish and seek to act like "big men" in the terminal (i.e., in their "territory"), started to exercise their influence. They gave minibus orders and demanded a small service charge for their efforts. Following multiple rounds of trial and error, they solidified their reputation as the sole supervisors of minibuses.



Photo 2. Tera Askebari Managing Minibuses and Passengers at Gerji Mabrat Hail Bus Stop

Tackling Unemployment through the MSEs Development Scheme

Around the mid-2000s, the government started to take notice of the importance of *tera askebari*. Initially, street life in the city had not been a major concern for the government. However, the government learned the significance of urban youths during the 2005 protest, in which youth played a major role with regard to the integrity of the election [Di Nunzio 2014]. As the informal sector's prominence and youth bulges became a threat to political stability in many countries, the Ethiopian government began to view unemployment as a cause of crime [Bayat 2004; Urdal 2006]. Thus, providing employment for urban youth became an important issue in constraining future political threats [Chinigò 2019]. In order to implement their aims, the government launched the micro and small enterprises (MSEs) development program, to appease the unemployed youths and regulate



Photo 3. Photo of Terminal X

the informal workers under their control.

The MSEs development program is a city-wide project that the government aimed to register three million people in government-led growth and transformational project schemes [Ministry of Finance and Economic Development 2010]. After the program was launched, many informal workers were obliged to register at MSEs development agency in order to operate their businesses legally. The information was disseminated within the street business sector, from shoeshine boys, street vendors, to parking attendants. Hundreds of *tera askebari* operating in various terminals registered their groups to MSEs agency as well. However, this formalization process, specifically concerning the legalization of *tera askebari*, did not guarantee the “formality” of *tera askebari*. The process kept within the

bounds of legalizing “private enterprises,” instead of incorporating their businesses into the public service. The major concept of the MSEs development scheme was to develop private enterprises by supporting them “publicly” [Eversole 2008]. This means that *tera askebari* were able to operate and manage their business autonomously without the government’s instruction. This condition allowed them to develop various methods for monitoring minibuses based on informal elements, such as personal relationships or intimacy with minibus operators.

The Informal Management of *Tera Askebari* in Terminal X

Tera askebari in Terminal X are responsible for three tasks (Photo 3). They oversee minibuses and passengers, and apprehending thieves in the event of a robbery. They collect 7 *birr*⁵⁾ per vehicle every time a minibus uses the terminal; and since their major role is to manage the minibus queue, they intervene if a vehicle tries to commit a foul act, such as working in an unassigned location or cutting the line. However, there is some flexibility with regard to the service charge, which can change conditionally. In cases where *tera askebari* cannot chase infringers out, they request a fee of 10 *birr*, which is 3 *birr*

5) *Birr* is a unit of Ethiopian currency. 1 USD was equivalent to 29.28 Ethiopian *birr* during the time of this fieldwork (October 1, 2019) retrieved from (<https://combanketh.et/exchange-rate-detail/>).

expensive than the normal service charge. However, *tera askebari* often prioritize personal acquaintances and give advance permission to specific minibuses without collecting a service charge, which is an act against their duties.

In the case of managing the passengers, *tera askebari* asks passengers to line up in a row. While it is an unwritten rule that passengers who cut in line are deterred to ride on minibuses, *tera askebari* shows some mercy to them. For those who cut the line, they permit such passengers to take a portable chair onboard, instead of a regular seat. As such, *tera askebari* was acting flexibly according to the situation, rather than acting by static rules. The variety sums of the rules *tera askebari* apply when handling queue-jumper, or imposing them penalties, or exempting some minibuses from the service charge, and offering special treatment to passengers who cut the line, shows the fluidity and variability in their informal regulation.

Discussing Urban Informality through *Tera Askebari*

Tera askebari act as major performers in creating and re-creating the dynamics of informality by negotiating with related actors, even though they have been “formalized.” There are pros and cons to the service they provide. At present, leaders of the *tera askebari* groups are gaining a huge amount

of money by hiring young people. Informal service provision can breed discontent among minibus operators and passengers. On the other hand, for young people who have difficulties finding a job, working as *tera askebari* is a good opportunity to earn a living. The government could lower the administrative burden without investing a lot of money. Citizens like me who suffer difficulties while trying to take a minibus can get on the minibuses comparatively easily with *tera askebari* there to provide guidance. For some, *tera askebari* are saviors, but for others, they are mere entrepreneurs who run a business by using minibuses. These dynamics of *tera askebari* activities, which possess both social contribution and informal aspects, coexist and illuminate the need for a careful and detailed approach in analyzing informal urban activities. At the current stage, discussing whether their system is sustainable may be premature. However, it is certain that this work has been and will continue to support of the citizens until the emergent systems are introduced.

References

- Bayat, A. 2004. Globalization and the Politics of the Informals in the Global South. In A. Roy and N. Alsayad eds., *Urban Informality: Transnational Perspectives from the Middle East, Latin America and South Asia*. Lanham, Boulder, New York, Toronto, Oxford: Lexington Books, pp. 79–102.
- Chinigò, D. 2019. ‘The Peri-urban Space at Work’:

- Micro and Small Enterprises, Collective Participation, and the Developmental State in Ethiopia, *Africa: The Journal of the International African Institute* 89(1): 79–99.
- Di Nunzio, M. 2014. What is Alternative? Youth, Entrepreneurship, and the Developmental State in Urban Ethiopia, *Development and Change* 46(5): 1179–1200.
- Eversole, R. 2008. *Solving Poverty for Yourself: Microenterprise Development, Microfinance and Migration*. Hyderabad: Icfai University Press.
- Ministry of Finance and Economic Development. 2010. *Growth and Transformation Plan 2010/11-2014/15*. Addis Ababa, Ethiopia.
- Urdal, H. 2006. A Clash of Generations? Youth Bulges and Political Violence, *International Studies Quarterly* 50(3): 607–629.